

私は誰誰であり、何を欲しているかを

第9期 竹内 亮介

つい先日、卒業旅行に必要な情報を調べようと、久しぶりにパスポートを開いてみました。すると、当時19歳の自分の顔が写っており、そこには、今の自分は失ってしまった少年っぽさが漂っていました。人間は変わっていくものだなあ…と悟ったような気分になってしまったことを覚えています。

19歳といえば、ちょうど小野ゼミに入会する直前の大学2年生の頃。小野ゼミに入って、僕は少年っぽさを失うという変化（退化？）を遂げたようですが、他にも、もう少し胸を張って主張できるような変化があったように思います。その変化とは、言葉にすると陳腐ですが「自分を深く知るようになった」ということです。大切にしている価値観みたくイイ感じのものから、人には簡単に言えなさそうなヨクナイ感じのものまで深く、です。

そもそも、なぜ、小野ゼミでの2年間を通じて、僕は自分を深く知るようになったのでしょうか。それはきつと、小野ゼミでは、自分から決して逃れられないから、仲間からも決して逃れられないからであると僕は考えています。例えば、個人課題や卒論は前者に、ケースメソッド・ディベートや三田論は後者に、それぞれ該当するかもしれませんが。皆様もご存知のとおり、その過程には、多種多様かつ規格外の困難が待ち受けているのですが（もちろん、多種多様かつ規格外の歓喜があることも忘れてはなりません）、あるときは自分ひとりで、あるときは仲間とともに、そういった困難と対峙していると、不思議なことに「自分は〇〇な人間だ」、「自分は〇〇が好きだ／嫌いだ」、「自分は〇〇が得意だ／苦手だ」といった類のことを、あるときは絶対的に、あるときは相対的に知るようになる気がするのです。自分や仲間と徹底的に——ときには嫌になるほど——向き合うことができる小野ゼミに身を置いていなければ、自分を深く知るようになることなど到底できなかつたのではないのでしょうか。そして何より、このような変化を、人生の岐路と言える大学3~4年次に体験できたことに、僕は大きな意味を感じています。

ここ最近愛聴している【Champagne】というバンドの『City』という楽曲の一節に、次のようなフレーズがあります。『It's time to know 私は誰誰であり、何を欲しているかを』作詞者が帰国子女ということもあり、歌詞がボーダーレス化していますが、僕はこの歌詞が大好きです。小野ゼミでの2年間を通じて、『私は誰誰であり、何を欲しているかを』知ってしまった僕は、それに忠実に従って、今後の人生を精一杯生きていこうと思っているところです。



小野ゼミとは家族である（著者は左下）